MJOT会報

国際交流基金ブダペスト日本文化センター
福島　青史

日本語を教えるようになってから、そろそろ 15 年になりますが、おなじ日本語教育といってもいろいろな現場がありました。ここでは、私が体験した日本語教育の多様な現場について書きたいと思います。

最初の赴任地はメキシコの片田舎の日系人学校でした。私一人しかいない学校でしたので教師、校長、会計、広報、お掃除、すべて担当。秋・冬は入学案内を作って道で配って歩きました。時はまさに「デカセギブーム」。私の学校からも半年勉強すると順番に日本にデカセギに行くようになりました。彼/女らの多くは成田空港で働いていて、「空港は、夏、暑いよ。スーツケースも重い重い」と笑いながら話してくれました。その話を聞いたとき、自分の学校がデカセギ者養成機関になっているような気がして、複雑な気持ちになりました。ただ、彼/女らがメキシコに帰国して買った広大な土地を見たときに、こういう人生もラテン的で面白いかな、とも思いました。

次に行ったのは旧ソ連のウズベキスタンで、メキシコと打って変わってエリート養成のトップ大学でした。大学もすごく厳しく、試験で点が 1 点でも足りないと容赦なく留年が決まりました。私の大学での仕事はカリキュラム作りから授業担当までで、この三年間が一番、教師的な仕事をしていたと思います。ここのテストがかなりユニークで、四半期に 1 回ある定期試験の問題数が聴解 10 問、漢字・語彙 40 問、文法 60 問、読解（長文）が 10 問とあり、これを 90 分でやるのです。最初見たとき、私はテストに驚きましたが、その次にそれを時間通りに終え、90 点を取る学生を見て驚きました。「テストは人を作る」といいますが、どんな難しい試験を出題しても、次にはきっちり修正してくる人間がいることを知りました。ウズベクでもたくさんの学生が日本に留学しましたが、ほとんど帰国しませんでした。ウズベクは経済的に苦しく、日本に留学すれば卒業してからそのまま日本に就職する学生がほとんどでした。ここでも「私はエリート配給会社か」と頭を傾げました。

日本語教育は地域、学習者によって様々な機能があります。学習者が日本語を学習してどうなるかを一人ひとり教師が面倒をみるのは難しいですし、その必要はないかもしれません。しかし、私は今でも自分が教えた学生がどうなったのか、あの時の日本語教育が彼/女らの人生にどのような役割を果たしたのか、が気になります。きっと学生からしたら余計な心配なのかもしれませんが、こういうことを考えるのが最近の私の日本語教育現場となってきています。

第１７回目のスピーチ・コンテストについて

ホルヴァート・クリスティナ

11 月 8 日に今年もスピーチコンテストが行われました。今年はどの部門の参加者もレベルが高くて、一生懸命発表している姿に感動しました。この 1 日のために去年の総会で発足した実行委員会が３月から動いていました。メンバーは大使館から一名、国際交流基金から一名、教師会から４名、学生スタッフが２名の合計８名+相談役に教師会会長と会計担当の２名です。年々資料が残るからだんだんやり易くなるはずですが･･･、色々考えさせられます。

私が答えを出せないことの一つはスピコンのイベントとしてのヴィジョンというかイメージです。ここ２・３年、大使館からの働きかけのおかげで、かなりの予算に恵まれていますが、それと同時に期待も大きくなって、運営の仕方をプロに近いようにしなければならなくなりました。実行委員の大半は本職をこなしながらボランテイアーでやるので、スピコン実行委員の労務負担にも限界があります。

一方、ハンガリーで行われている日本語のお祭りとして一番大きなイベントはスピコンですから、スピーチできる人は限られていても、パフォーマンスの参加者として、学生ボランティアとして、見に来るお客さんとしてでも、とにかくもっともっと大勢の生徒さんに関わって欲しいと考えています。今年の方針として学生に任せる仕事を増やし、責任を持たせる事にしましたが、この面では成功したと思います。ただ毎年泣いている子や、悲しくなった顔で挨拶もしないで帰る子を見ると、もっといい方法、勝ち負けがない、みんな勝てる方法はないのかな～と思ったりします。

ハンガリーで日本語を勉強している学習者の数は１５００人を超えていると調査結果が出ていますが、それに比べて、見に来るお客さんも含めて、関わる人の人数も少なすぎる気がします。仕事が終わって、今年の実行委員会が解散になります。そして、次の総会で次の実行委員会が発足します。新しいメンバーの新しいアイデイアでもっともっといいイベントになったらいいなと思います。参加者を始め、指導してくださった先生方、スポンサーの方々、審査員、質問者の先生方、学生スタッフのみなさん、本当にたくさんの方の応援のおかげで大きなトラブルもなく、イベントを無事終了することができました。皆様に感謝を申し上げたいと思います。

『第 17 回日本語スピーチコンテスト』　2009/11/8

ラトビアの日本語教育

小野　久禎

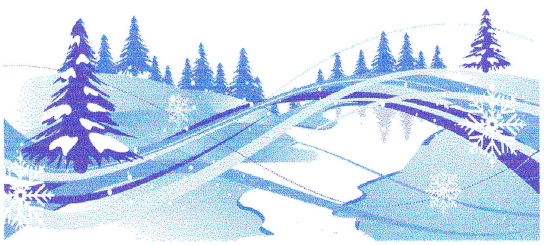
皆さん、今日は。今年の９月まで一般企業で働いていましたが、９月から晴れて日本語教育に ELTE の日本語教師として現場復帰することができました。正職員として日本語を教えるのに３年のブランクがありますが、今後ともよろしくお願いします。

さて、私は、ハンガリーに来る前、ラトビア大学にて日本語を教えていました。今日は、私が赴任していた当時のラトビアの日本語教育について少し書いてみようと思います。ラトビアの学生からの話によるとここ３年でラトビアはいい意味でも悪い意味でも大きく変わったとのことです（ハンガリー同様ラトビアも経済危機で IMF からの支援を受けました。）。そのため、私が書くことは現在のラトビアとは大きくかけ離れている可能性が高いので、予めご了承ください。

私がラトビア大学に赴任したのは 2004 年２月で、ちょうど後期授業が始まる数日前でした。飛行機が夜中に到着し、雪が降る真っ暗闇の中をタクシーで初日滞在先のホステルまで移動したことは決して忘れられません。皆さんラトビアの冬と聞くとハンガリーよりずっと寒いとお思いかもしれませんが、全くそのとおりです。ただ、初めて日本語を教える期待で外の寒さや提供された汚い寮の部屋、廃墟などは全く気になりませんでした。逆に美しい旧市街や思っていた以上に口にあった料理などがより一層私にやる気を起こさせました。

さて、ラトビアの日本語教育ですが、ラトビア大学では原則２名の日本人講師で日本語を教えることになっていました。しかし、赴任当初から日本語教育をしている中等教育機関、リーガ文化学校の日本語教師がいなくなってしまい、私は大学と掛け持ちをすることになりました。また、その半年後には同僚が基金の研修へ行くことになり、しばらくの間ラトビア国内の日本人日本語教師が１名という状態が続きました。そのような中で授業だけでなく各種申請書類の作成、学術交流協定のアレンジ、スピーチコンテストの企画・運営などをしなければならず、四六時中働いていたことを覚えています。私もがんばりましたが、仕事ができたのは、同僚はもちろん、大使館の方、文化学校の救援に来てくれたラトビア大学の学生たちが時間を問わずサポートをしてくれたからです。ラトビアでは一人で仕事をしていると感じても実は他の人が支えてくれているのだと知ることを学びました。

ラトビアでの授業は、教材がほとんどなく、コピー１枚取るのもたいへんで、教授法について語り合える同志も同僚しかいませんでした。ハンガリーでもコピーはいつも悩みの種ですが、教材の数や人材面では、基金があることと教師会が大きいことでブダペストは本当に恵まれていると思います。現在、私は多くの人からいろいろなことを学び、基金で好きなだけ教材を使える幸せにたいへん満足しています。ハンガリーに来たのは妻と結婚するためだけでしたので、ハンガリーに来ることなど以前は全く考えていませんでしたが、ハンガリーに来られて本当によかったです。



「遊んでいます。」

内川　かずみ

初めて日本語を教えてみたのは5年前、ハンガリーに住む中国人の女の子が相手でした。自信が無かった当時のレッスンは 90 分 200ft。それから日本語を教えるという仕事にすっかりはまってしまい、経験や練習を重ね、運やまわりの人たちに助けられて今に至ります。

現在は ELTE 大学と国際交流基金日本語講座で教えております。ほかにもいろいろやっているので、「あっ、内川さん、こんなところにもいた！」なんて言われたりします。自分を動かしているものは一体なんだろう？と時々考えます。お金でもないし、名誉でもない。「日本とハンガリーの架け橋に…」なんていう殊勝な心がけも残念ながらありません。どうやら私は、遊んでいるのです。使命感のようなものさえ持って、大真面目に。私は時間をかけてやっとその境地にたどり着いた気がします。見返りを望まないために。一人でも楽しく、全力でやれるために。嫌なことがあっても、忘れて次に進めるために。

私の「遊び」をいくつかご紹介させてください。

まずは、だんだん知名度も上がってきたかと思いますが、「ニハハ・クラブ」です。これは「日本人とハンガリー人で話そう！クラブ」の略で（学生が考えてくれた名前です）、どなたでもご参加いただけます。次回は 12 月 17 日ですので、皆様ぜひぜひ、お誘い合わせの上、いらしてください。http://nihahaclub.exblog.jp/

それから、学生たちの書く作文が好きでしかたがなくて、最近ブログをひとつ立ち上げました。やることに追われて少しずつしか進んでいませんが、まだまだストックがたくさんあります。（もちろん、書いた人の許可は取っています。）お知らせなども載せています。http://japanora.exblog.jp/よかったらご覧ください。

そして、スピーチ・コンテスト！これは私の日本語教師人生の中でかなり大きな割合を占めています。今年度のコンテストにも、まわりの学生が何人か出場しました。練習の際は、何度もお互いのスピーチを聞き、一緒に一人ひとりのテーマについて考え、話し合いました。スピコンに出た学生は受賞の有無によらず、見違えるほど成長します。その感動が忘れられず、毎年出場を促してしまいます。先日、一緒に練習した仲間たちと、打ち上げと称して喫茶店でお茶をしました。思っていたような結果が出せた人も出せなかった人もいましたが、全員とても嬉しそうに「出てよかった」と言ってくれました。

「遊んでいる」と言っても私のクラスは本当に厳しいです。1年生は1年でだいたい半分落ちます。そのうち辻斬りに遭うかも、と思ったりします。受けて立とうじゃないか。私が厳しくするのは、本気でやっている子達のためです。上に合わせた授業をしています。中でも特に本気でやっている子達は、「遊んで」いるのが伝わってきます。成績やテストのためではなく、ほかの誰かのためでもなく、単純に勉強が好きなのです。やりたいことをやっている学生はキラキラしていて、「負けられん！」と思います。学生たち、かわいいです。一人ひとりの個性を考えるとどこでもニヤニヤしてしまって困ります。

私は、力の限り、これからも遊び続けるつもりです。

相馬笙子先生を偲ぶ

佐藤 紀子

忘れもしません。9月5日午前11時頃ベルリンのヨーロッパ日本語教師会シンポジウムの会場。セーカーチ・アンナさんが私のところにかけよってきて、「相馬さんが亡くなった！」と目にいっぱい涙を溜め私の耳元に囁きました。私は一瞬、アンナさんが何を言っているのかわからず、「えっ、何？、何の話？」と訝しげに聞き返したのでした。アンナさんは小声で「相馬さんが亡くなった」を何度も繰り返すばかり。「どうして？何が原因？」「わからない！亡くなったというお知らせだけ。」携帯電話を切っていたため、相馬先生逝去の知らせは、ハンガリーから後藤史与さん、ホルヴァート・クリスティナさんを経由してベルリンの私達の元に届いたのでした。ついこの7月、見晴らしの良い相模大野のマンションに泊まらせていただき、楽しい3日間を過ごしたばかりの私は、その知らせを殆ど信じることができませんでした。「ありえない！」

本当に突然のことでした。9月4日午後、恐らく夕食を作っていらっしゃった最中にご気分が悪くなり、ソファーに横になったままお亡くなりになったとのことです。74 歳でした。相馬笙子先生、私達相馬先生をよく知る者にとっては「相馬さん」、ハンガリーの友人、知人にとっては「ショウコ」さんがお亡くなりになったのです。茫然自失の状態がしばらく続きました。

相馬さんの突然の悲報に49日を過ぎた今でもまだ半分信じられない状況が続いています。あまりにも急に、そしてあまりにも早く遠い世界へ旅立たれてしまいました。

相馬先生は、長年東京都の小学校で音楽教育に携わってこられる中、合唱指導のためにコダーイ・システムの勉強でハンガリーへ何度か足を運ばれ、定年退職後、ブダペストに移住されました。しかし、昨年、ご自身のご健康に不安を覚えられ、日本に帰国されていました。ハンガリーでは、長い間、セゲド大学で日本語を教えられたほか、個人レッスンなどを自宅でなさりながら、ケストヘイの人生の樹学園のサポートなど、ボランティアのお仕事に取り組んでこられました。

ハンガリー日本語教師会にとって本当に大きな存在を失ってしまいました。先生は、2001年に MJOT が設立された際の設立メンバーの一人でした。そのご功績は、会設立のための細々とした準備や日本語・ハンガリー語語彙集の編集・販売・管理・会計を始め、2002 年にブダペスト商科大学で開かれたヨーロッパ日本語教育シンポジウムの際には実行委員、長年の運営委員、2005～2006 年度には会長職にも就かれ、陰になり日向になり教師会のために尽力されました。事あるごとに教師会へのご寄付もいただきました。

相馬さんを一言で言い表すとすれば、何と言ってもその圧倒的な存在感を挙げなければなりません。相馬さんにとっては学歴も収入も地位も意味がなく、いざという時には、自分の正しいと信じることを直裁に勇気を持って発言される稀有な方でした。私達会員はいつも相馬さんに安心感をいただき、相馬さんが応援してくださるなら、少々無理な事業でもできそうだと思わせてくださる、そんな威力、オーラのようなものをお持ちでした。

それと同時に、相馬さんは大変細やかな心配りのできる方でもありました。それが、多忙で安月給な身でありながらボランティア活動をするハンガリーの日本語教師会へのご寄付や、運営委員への折々の手料理でのおもてなしに表れていました。運営委員会や研修会をブダペストの夜景を一望のもとに見渡せるご自宅のサロンで開かせていただいたことも度々ありました。

私が初めて相馬さんとお会いしたのは、かれこれ20年以上も前のことですが、それ以来家族ぐるみでお付き合いさせていただきました。ハンガリーにいらっしゃった頃は、よく愚痴を聞いていただいただけでなく、いつもご助言をいただき、励まし、支えてくださいました。相馬さんの大胆な発想、論理的な考え方、そしてどんな人にもおもねらない、凛とした、毅然とした生き方、態度がとても好きでした。尊敬していました。私にとって相馬さんは、知恵と経験に満ちた大先輩、そして人生のアドバイザー、言わばメンターのような存在でした。

たばこをくゆらせながら単刀直入にお話をなさる姿は、ある種姉御の雰囲気を漂わせておられ、初めて会った方は幾分の恐怖感を覚えたかもしれません。しかし、実は心優しい方でした。もう相馬さんの優しい笑顔が見られないかと思うと、大きな英知の泉、安らぎの場を失ったようです。そうした喪失感とともに、未だに半信半疑な状態が続いているのは、おそらく相馬さんが肉体的にはあの世に旅立たれてしまいましたが、存在感という点ではこの世に強烈な刻印を残していらっしゃる証ではないかと最近思うようになりました。人間は誰しも、思い出す人がいるかぎり、肉体は滅びても精神は滅びないのだと、相馬さんを想うたびに考える今日この頃です。

運営委員会からのお知らせ

2008-2009 年の教師会活動も間もなく終わります。年に一度の『**総会**』を下記日程と場所で行います。総会成立には正会員（11月 30 日現在 42 名）の過半数の出席がなければなりません。万難を排してのご出席をどうぞ宜しくお願いいたします。

日時：**2009 年 12 月 11 日(金)17:00～**

場所：**国際交流基金 Bp.日本文化センター**

※尚、当日止むを得ないご事情により欠席される正会員の方は 12 月 10 日までに運営委員会へ委任状(形式自由)をご提出下さい。

提出先：goto234@hotmail.com

会計より

12 月 11 日の総会終了後、2009-2010 MJOT **年会費の納入**をお願いします。

ＭＪＯＴ出版物のお知らせ

エーレッチェーギ日本語問題集(中級・聴解 CD2 枚付き)が完成しました。一般販売価格は 2,990Ft.です。ご注文はキッシュ先生へ！kissneilona@hotmai.com

編集後記 三年間休刊していた会報を今年 4 月から再び発行し始めました。会報 1 号の頃(2001年)はキャノワードで文章を書き、イラストを糊付けしていましたが、今は Word により編集作業も楽になりました。第 17 号は 2010 年 1 月発行の予定です。皆さんのお声をお寄せ下さい。

MJOT 会報 16 号
発行：2009 年 11 月　　編集：後藤史与
発行人：ハンガリー日本語教師会